



あらいこうき
荒井幸吉さん (久田野)

白河農工高陸上部に所属し、正走者に抜きされた。
「2020年までには東北の復興が終わることを望みたい。復興が終わった記念のオリンピックにしてほしい。」



やぶきまさお
矢吹正男さん (矢吹町)

白河農工高陸上部に所属し、正走者に抜きされた。
「日本が元気になるような、復興のオリンピックにしてほしい。福島も元気になってほしい。」



みずのやけいご
水野谷慶吾さん (中島村)

白河農工高 (現在の白河実業高) 陸上部に所属し正走者に抜きされた。
「開催が決まり、当時の記憶がよみがえった。東京だけでなく、東北、そして日本全体が盛り上がってほしい。」



うえのきよし
植野浄さん (五番町川原)

当時は市の職員で、走者たちを指導。「今は昔と比べると体を動かすことが少ない。オリンピックを見て、子どもたちが興味を持ち、スポーツを好きになってほしい。」



当時の聖火リレーの写真



①走者のユニフォームとトーチ
②閉会式のチケット (上) と閉会式の写真
③聖火リレー参加記念章

まさか自分が走者になるとは思っていなかった。選ばれたときはすごいことになったと思います。とても誇らしかったです。当日はすごく緊張していて、とにかく無我夢中で走りました。走り終えて次の走者に聖火を移すとき、火が付くのかドキドキしました。その瞬間、ほんの少しの時間が、まるで止まったかのようにとても長く感じたのを覚えています。走者を務めることができたことは、人生の大きな経験になりました。一生の思い出です。

正走者 水野谷慶吾さん

時間が止まったようだった瞬間

白河市の正走者は7人で、各正走者に副正走者が2人、伴走者が20人付き、一つの区間を23人で走りました。正走者の選抜の基準はスポーツを志す生徒で、各高校が選びました。練習では、トーチを持つ腕の角度や走るスピード、歩幅などを意識しながら、本番に向け一生懸命に取り組んでいました。

指導者 植野浄さん

走者の懸命な練習を見守る

中、選ばれた7人の走者がトーチをつなぎました。

東北の復興。そして日本中を元気に。次回の東京オリンピックに、4人は大きな期待を寄せています。6年後の2020年。自分たちがかわった前回の思い出をかみしめながら、やさしいまなざしでオリンピック観戦を楽しむ4人の姿が目につきました。

東京オリンピック2020

東北の復興。そして日本中を元気に。次回の東京オリンピックに、4人は大きな期待を寄せています。6年後の2020年。自分たちがかわった前回の思い出をかみしめながら、やさしいまなざしでオリンピック観戦を楽しむ4人の姿が目につきました。

走者に選ばれたときは、実感がありませんでした。自分よりも親のほうが喜んでくれたように思います。当日は沿道からたくさんの方の応援もあり、気持ちが高ぶっていたので、決められた時間よりも早く次の走者のもとに着いてしまいました。話を聞くと、ほかの走者も同様だったようです。ふたたび東京でのオリンピック開催が決まり、新たに気持ちの高ぶりを覚えました。

正走者 荒井幸吉さん

新たに気持ちが高ぶる

会式に参加させてもらいました。大型スクリーンに映し出された次回開催地の「MEXICO」の文字を見たときは、とても感慨深かったです。また東京に帰ってくると思わなかったもので、とてもうれしいです。

感慨深かった閉会式

正走者 矢吹正男さん

旧市役所付近の区間を走りました。走っているときは夢中で声援も聞こえませんでした。走り終えてから、沿道の人の多さに驚きました。その中を走ったのだと実感し、名誉に感じました。私は、オリンピックの閉

特集「東京オリンピック1964」聖火リレー走者インタビュー

おかえり、オリンピック。 今よみがえる50年前の記憶

「東京オリンピック2020開催決定」。昨年の9月、この報道に日本列島が沸きました。今からちょうど50年前の1964年(昭和39年)、日本で初めて開催された東京オリンピックの聖火リレーが、本市を駆け抜けたことはご存じでしょうか。その聖火リレーに携わった4人の方に、当時のお話を伺いました。